

風土



石川桂郎俳句鑑賞

南 うみを

酔眼を瞠きみひらき枯葎

(句集『含羞』より昭和二十九年作)

桂郎師は昭和二十一年に鶴川村に疎開しています。その頃は村人の疎開者に対する目は厳しいものでありました。それに加え、桂郎師もしばしば街に出ては酔い戻って来ていたので、「村八分」のような扱いだつたようです。更に新宿の酒場「ボルガ」に通うようになってからは、毎夜の如くの御帰還だつたようです。七畳小屋までの道は暗く、蛙あり藪ありです。「瞠きみひらき」に桂郎師の必死の思いが出ています。

父と子と春水を跳ぶ竹撓はせ

(句集『含羞』より昭和三十年作)

「父と子」の「子」は長男の徹郎さんのことです。この頃の徹郎さんは体が弱く、前回採り上げたように「遠蛙病む子もつとも寝入りたり」のような状態でした。やっと元気を取り戻し、父と遊び興じているところを句にしたものです。春の小流れを竹の棒を使って跳び越える遊びです。「竹撓はせ」に病が癒えた徹郎さんへの慈しみがあがり、桂郎師の父情が伝わります。

神威器俳句鑑賞

南 うみを

花火消え一千万の目ののこる

(句集『水輪』より平成十九年作)

この句を読むと、西東三鬼の「暗く暑く大群衆と花火待つ」を想い起します。恐らく下敷きになっていると思われる。ただし、三鬼の句は花火の揚がる前ですが、器師の句は花火が消えた後です。それも「一千万の目」とありますので、東京のすべての人々が花火を見上げているような世界を想像します。夜空から見たらこの「一千万の目」がぎらぎらと残っている様子は異様です。

十六夜や歩けるところまで歩く

(句集『水輪』より平成十九年作)

器師は平成十六年七十代半ばで脳梗塞で倒れました。幸い後遺症もなく軽くて済みましたが、その後は用心して暮らすようになりました。これは十九年作ですので、八十に近い頃です。「歩けるところまで歩く」には、年齢や体調を考え、とにかく生きられるところまで生きようという想いが表れています。それも器師にとっては死者の魂の棲む「十六夜」の光に照らされながらです。月には妻の魂も眠っています。

郭 公

南 うみを

郭公や賢治はトシを慈しみ
藤椅子の手よりぽろりと『春と修羅』
豆飯の残りたちまち炒飯に
鴨足草にぎやかに揺れ村古ぶ
きしきしと分蘖すすむ夜の植田
中干しや青田の株のみなぎつて
どうにでもなれと叫びてまくなぎへ
はなむぐり呑んで大揺れつりがね草
荒梅雨の蔓が大樹を攻めのぼる
黒松の亀甲深き夏至来たる
網戸して森のすだまの声聞かむ
まむしの子はやもとぐるを見せ呉る



竹間集

同人作品



青水無月

内藤 静

脈々と水や青水無月の崖線はげ
骨密度計られてをり太宰の忌
菩提樹の緑陰といふ芳しき
ばら剪つて逡巡ひとつ断ちにけり
卯月波松ことごとく傾きて
天網を漏れて鳴神さまよへる
蛞蝓といふ無防備を生きんかな

半夏生

土井ゆう

賜りし新茶に適ふお湯加減
庭石のしづかに濡れて濃紫陽花
四阿に緑雨の傘をたたみたり
栗の花いつ晴るるとも知れぬ空
海猫の列風に抗ひ風が好き
はしりとて甘し酸つばしさくらんぼ
岳を消し雨の近づく半夏生

花南天

森高 武

梅雨晴の風を四方に大櫂
薔薇園の通路いくつも行き止まり
マスク下げ泰山木の香を貰ふ
遅れ来て皆の集まる未草
睡蓮の池を支配す牛蛙
花南天葉書忘れてポスト前
顔見世の画眉鳥庭に花とべら

枇杷の種

浜 福恵

東国の遅き梅雨入りや燕の子
あと十日木槵子もくげんしの花の開くまで
枇杷熟るる一湾の波きらめきて
山神さまへ所望申して枇杷を挽ぐ
天然の枇杷の甘さを口々に
コロナ禍の弱気をふいと枇杷の種
惣兵衛枇杷のむかしを山の時鳥

夏着縫ふ

鈴木 石花

皇太后に縁の上毛菖蒲園
近付ける東京五輪風薫る
早朝の家族総出に実梅もぐ
外出可になる日近付く夏着縫ふ
お茶の水眼科に予約汗拭ふ
七月の暦に印す外出日
夕焼けの染めし隙無き榛名山

パナマ帽

門伝 史会

籠り居の金魚逆立ちしてゐたり
緑蔭を縫つて西海子小路かな
青葉照る文学館のバルコニー
物忘れしたかに急ぐ梅雨の蝶
時の日や卓に真白きゆで卵
羅南主宰の俳句協会四賞授与式へや表彰式に久に逢ふ
パナマ帽昭和は近くして遙か

昼 寝

山田 暢子

どの木々も浄められをり青時雨
濡縁は団扇の方が良く似合ふ
ワクチンを打たれ昼寝に没頭す
夏座敷みどりの風を通しけり
六月の中の一日は誕生日
日盛りやメールで済ますことふゆる
病む人に夜の風鈴外しけり

片 蔭

岩木 茂

造船の空のドックやさみだるる
砂利踏み御所の片蔭まで遠し
蜘蛛の子の宙飛んで糸張つてをり
鬼やんまジャングルジムを抜けて来る
あの家もこの家の空き家蚩飛ぶ
駅長の机に麦藁帽子かな
はまなすやオアシスとなる防砂林

麦 星

田中佐知子

夫を呼ぶ今朝百合の開きしに
ラムネ抜くちははに悔ふつふつと
天花粉ふるさと日々に遠きかな
鳩居堂香の匂ひの涼しかり
鳩居堂あふぎ比べて選る扇子
葎簀透く漁火かはた星々か
麦星や風の間に間に稽古笛

緑蔭ひとつづつ

中村洋子

街路樹の緑蔭ひとつづつ拾ふ
消えてより線香匂ふ走り梅雨
まだ少し息ある虫を蟻が曳く
青水無月ランプシエードの和紙のしわ
時の日やりモート会議昼夜なし
水替へて膨らむやうな金魚鉢
胸元に枝引き寄せて袋掛け

桐の花

橋添やよひ

一の鳥居くぐりて馬場や桐の花
少年の碁士の一手や涼しかり
父の日や大樹の風に吹かれをり
文化庁予定地わたる風薫る
卯の花腐し蔵より洩る醬油の香
片言が話を凌う豆ごはん
十葉の陰干しばばの貌となり

枇杷熟るる

浅田光代

田の風のうるんできたる円座かな
酢を打つて白米立たす雲の峰
月光の舟屋に寄する海月かな
蟻の列ふいとひとつが離れゆく
ひと声のあと身震ひの羽抜鶏
回廊に僧の消えたる白雨かな
登らねば会へぬ神さま枇杷熟るる

青梅雨

柿沼 盟子

麦秋や最中の館のふつくらと
一山の青葉を磨く日と雨と
青梅雨やピアノに譜面開かれて
ジャングルジムに鴉の遊ぶ梅雨晴間
六月の谷底にある交差点
脇門の広く開く寺半夏生
ピーマンを切れば真夏のかをりかな

青田風

高村令子

夢に覚め夢を忘れて明易し
梅筵束の間に過ぐ喜寿傘寿
農良衣干す夏の大塚岐正面に
本名と俳号を持ち野に遊ぶ
生きるとは息をすること青田風
惚けてはならぬならぬと髪洗ふ
夏草になつてしまつたかくれんぼ

太宰忌

土井三乙

太宰忌の蓋外しあるインク壺
六月の一日太宰を読むことに
短夜の人間失格読み止しに
暮れ残る雲のごとしよ栗の花
突堤の海猫に間合を測らるる
細波は田水の震やませ来る
花屋出て片蔭ひろふ裏通

沙羅の花

林 いづみ

短夜や追悼「空」をかたへにし
むらさきの夜明けよ姫沙羅の花よ
雛僧の細き脛出づ沙羅の花
みどり児は母の胸許卯波寄す
爛熟の実梅の埋む木の根元
リンゴ酢と氷砂糖と青梅と
父の日の手足大きな父のこと

鵜飼舟

小林 共代

篝火を川面に映し鵜飼舟
首結をゆるめられし鵜鮎を吐く
鵜飼ひ果て笛吹川に闇もどり
朝まだき鵜縄に湿り残りをり
茅の輪潜り神に小さき願ひ事
雨のまま暮れてしまひし山紫陽花
ひきがえる出て夕闇の濃くなりぬ

夏つばめ

中根 美保

夏つばめ風にぶつかつては返す
六月やレモン真青きまま育つ
森の気をまとひ戻りぬ夏帽子
緑蔭や走り来る子に膝を折り
朝風や葵をつぶさに繭の花
ひつそりと一誌鎖され夏の月
土の香を立てて雨来る葭簀かな

卯波立つ

間島あきら

世なほしの人欲しき世ぞ卯波立つ
五月雨や正雪紺屋の鉄格子
柱頭はイオニア式よ館涼し
白南風や宿の切れ間に海の紺
ほととぎす鳴いて碧空裏返す
夕の日へ腰を畳みて田植かな
八百の襲のいろめ山わかば

山河集

同人作品



南うみを選

ぐるぐるとヒツチコックめく梅雨の涼

奥田 茶々

父の日やあぐらの舟をひとり占め

五万本の十字架の丘風薫る

夏燕聖火リレーを横切れり

等間隔の石置き屋根や風薫る

万緑に泛びし富士の細身かな

森田 節子

風を待つ静けさのあり青芒

夏帽子駆け入る絵本ミュージアム

桂郎師の墓所に先客冷し酒

啜へられ沢蟹白き腹を見す

分蘖の植田にあがる泥けむり

小原美美子

みじろぎにきしむ飴色藤寝椅子

実梅落つ乾びきつたる水車

白玉や丹波私雨もよひ

潮垂れのボード立て掛く雲の峰

六月の卍に曲がる用水路

空海の杖痕といふ清水汲む

浜木綿や奇岩の続く紀伊の浜

父の日の戒名善き字ばかりなり

森の端に白き教会夏ともし

岡本 尚子

梅雨寒やインド更紗を腰に巻き

三好 康子

青梅雨やオムレッツ色の灯影濃し

六月や風にふくらむシャツを着て

さらさらと茶筒を満たす芒種かな

蛸干すや磔刑のごと足広げ

風土独語／南 うみを



ぐるぐるとヒッチコックめく梅雨の棕

奥田 茶々

「棕鳥」は群れで行動し、並木などに大集団で飛来し、鋭い声を挙げる様子は怖いくらいです。作者はそこから、ヒッチコックの人間を襲う鳥の群れの映画を連想しました。「ぐるぐると」が映画のシーンと重なります。

噴水の風を押されて昂りぬ

渡辺 やや

「噴水」が風を押されて揺らぐばかりでなく、風に負けじと噴き上がるところを描いています。風のない時の噴水と比べたら、「昂りぬ」が適切な言葉であることが解ります。

万緑に泛びし富士の細身かな

森田 節子

広大な裾野を持つ富士の万緑がまず目に飛び込んできます。裾野から頂きへ「万緑」が攻め登っていく景は、さすがの富士も細く見えるのです。まさしく「富士の細身」です。

うなじまで被ひ農婦の夏帽子

津川かほる

農家の女性は、身だしなみとして日焼けせぬよう農作業では極力肌を隠します。「うなじまで被ひ」が、農婦の夏帽子(麦藁帽)の被り方です。特徴をよく掴んでいます。

潮垂れのボード立て掛く雲の峰

小原芙美子

「潮垂れのボード」はサーフボードです。サーファーが海からあがり、実際は浜の家の壁にボードを立て掛けたのですが、「立て掛く雲の峰」と置くことで、真夏の広大な海と空が現れました。

捕虫網見えて祖父母の見える来し

山田 健太

この句は、「見えて」を繰り返すことで、視線の高低差を上手く伝えています。高々と挙げた子供の「捕虫網」がまず見え、次に付き添いの祖父母が見えて来たのです。また「祖父母」と置くことで、田舎に帰省中の子供であることもわかります。

空海の杖痕といふ清水汲む

岡本 尚子

空海は唐で密教だけでなく、土木技術も学び、四国のため池「満濃池」を修復したことも知られています。当時の人々に水はとても大切でした。空海が杖で突いたら清水が湧いたというのがそれに基づいています。作者はそれを反芻しているのです。

ががんぼの百鬼夜行のしんがり

六車 佳奈

夜の暗闇を様々な百鬼が列をなしていく。そのしんがり「ががんぼ」だと言います。あの長すぎる脚を揺さぶる、怪しげな様子から発想を飛ばしました。

風土集



南うみを選

噴水の風を押されて昂りぬ 宇治 渡辺 やや

ひと雨の去つて夕べの釣忍
梅雨探し漢方薬の匂ひ濃く

蛸料理レシピ教はる半夏生

故郷は吾が戸籍のみ遠郭公

うなじまで被ひ農婦の夏帽子 川崎 津川かほる

米粒のごと花南天の蕾かな

脇に挟み長き祈りの夏帽子

金魚飼ふ竜宮城を設へて

薫風や東京湾に風の塔

ナイターの灯のいきいきと無観客 水戸 山田 健太

こそばゆき筆跡のある驟雨かな

捕虫網見えて祖父母の見える来し

雪隠の大きな旧居梅雨晴るる

餓鬼大将青大将をぶん回す

神木へ夏鶯の径を抜け 高槻 六車佳奈

お供へを横目で見つつ地藏盆
海流のぶつかる音や夏薊

ががんぼの百鬼夜行のしんがり

藤椅子の揺れて今昔行き戻る

青空に無数の疵や杜鵑 上尾 根岸 善行

森一つむかうの森の閑古鳥

病院へ少し斜めに夏帽子

接種して夏至の美空となりけり

蜻蛉の目くるりと宙を裏返す 舞鶴 谷田明日香

緑陰よりトランペットの高らかに

水面打つ尾鰭の猛し首夏の鯉

返信をただ待つ夜やほととぎす

三伏や二つに割れし大絵皿

通学の近道は畦田水沸く